

高鷲町内集落地誌（1）

「続高鷲村史」より編集して再掲載した。

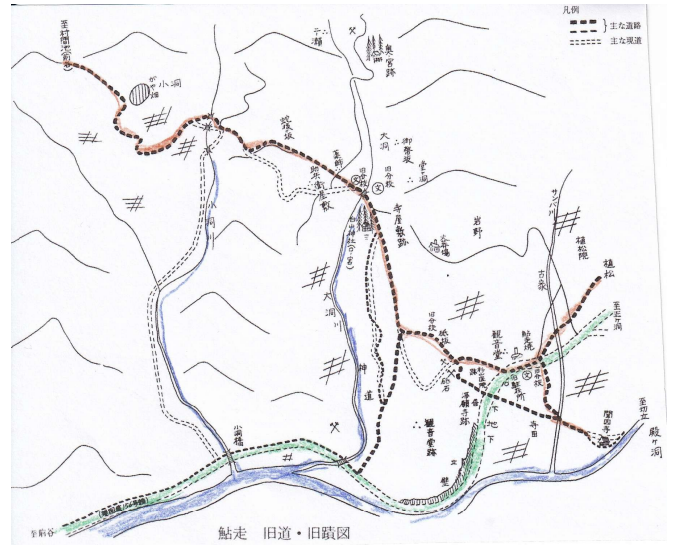
鮎走

鮎走の地名の由来は、鮎走由緒書や泰澄大師伝記などに書かれているが、定かではない。

鮎走地区は地形などの自然環境と開拓歴史的な背景から2つの地域に大別することができる。一つは沼沢、河川敷が干拓されて農地が造成された下地下・古家・神道と、もう一つが堂ヶ洞を中心とした信仰的環境のある山麓の農地を開拓した集落の大洞・小洞である。

下地下などは長良川と古家川の堆積によってできた谷底平野で、ここを開田目的で先人が入植した。

この開田事業が終わると、新しく産業の開発が行われ、その過程で着目されたのが、砥石の採掘、製糸業、鮎走焼きという窯業であった。



鮎走地区旧道・旧蹟地図

一方大洞・小洞の住民にとっては、この地区が口之宮・奥宮・大滝院・浄蓮坊などの堂祠が残る宗教的特別区として誇りを持っていた。また住人は宗教的雰囲気の中で、農業・養蚕業を主とする生業のかたわら、木紙・干柿・渋柿・ワサビなどは、立地条件を生かしたこの地区の特産品であった。



平成4年当時の鮎走地区古家、下地下・神道・寺田など長良川の堆積作用によってできた谷底平野。



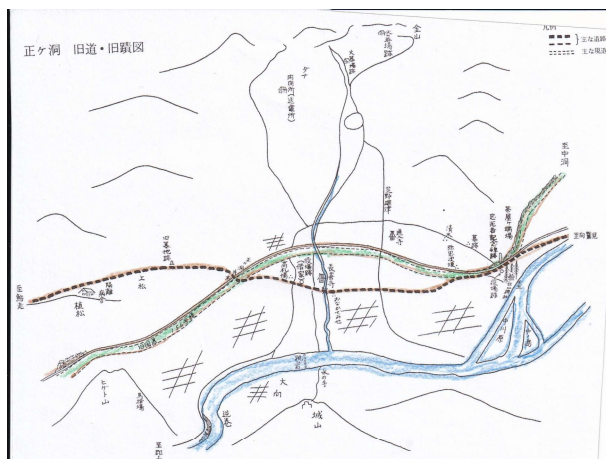
鮎走旧国道沿線住宅(令和7・6・9撮影)

正ヶ洞

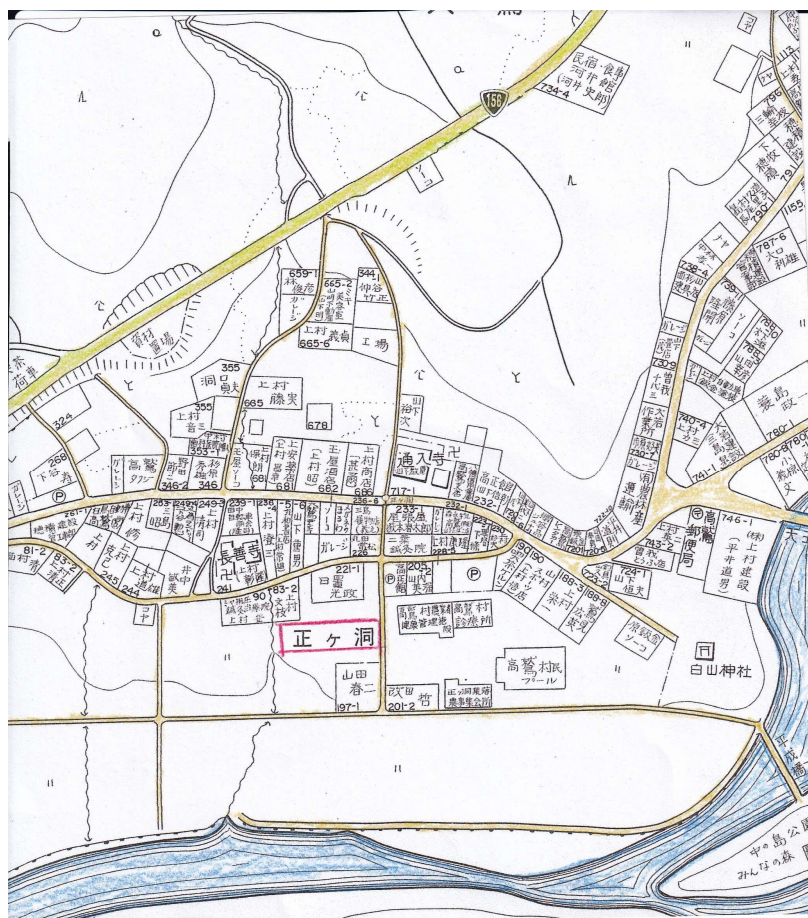
地名の由来は、泰澄大師の命名に起因があるとされているが定かではない。

旧道は古家を過ぎ、植松の急坂を登り、ヒゲト山の山麓の植松峠を抜け、緩やかに下降して長善寺前を通り、茶屋ヶ巾の尾根を横切りって中切にいたる。この東西に連なる白川街道に南面するなだらかな傾斜地に民家が集中し、昔から街道筋の宿場的な存在であった。鷺見郷内の店舗のはじまりともいわれている。

明治 32 年に白川街道の大改修が行われ今の道路が敷かれてからこの道沿いに人家が集中して町並みが形成された。



正ヶ洞地区旧道・旧蹟地図



平成 4 年当時の正ヶ洞地区

昭和 51 年に正ヶ洞バイパスが開通しても正ヶ洞の町並みは鷺見郷の宿場的様相を示した。

このように商店街が形成されるのは白川街道や国道 156 号線における濃飛の中継地としての地の利と同時に、鷺見郷のほぼ中央に位置する利点もあった。

そして、豊富な生活用水として伊兵衛が開削した正ヶ洞井水が大きな役割を果たした。この水路は鷺見郷内における最大規模の多目的用水路で、常時長良川から導水して今日まで絶えることはない。



現在の正ヶ洞商店街(令和 7・6・9 撮影)